View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

《研究ノート》

スポーツ健康科学部におけるインターンシップの授業報告

荒井　宏和，田畑　　亨，松田　　哲，上野　裕一，西機　　真
黒岩　　純，鈴木　麻里子

A report of internship in the Department of Health & Sport Sciences

Hirokazu ARAI, Toru TABATA, Tetsu MATSUDA, Yuichi UENO, Makoto NISHIKI
Jun KUROIWA, Mariko SUZUKI

キーワード：インターンシップ，キャリアデザイン，サービス・ラーニング
Keywords: Internship, Career design, Service Learning

1．はじめに

本授業は，学外で展開されているスポーツの実践現場や教育現場などの機会を通して，学内で学んだ基礎的な理論を発展させ，学外で体験する実習を専門的な応用の場，つまりインターンシップとして位置づけ展開した。

文部科学省の報告によると，平成19年にインターンシップを実施した大学は，教育実習・医療実習・看護実習など特定の資格取得を目的として実施するものを除外し，調査対象となった全国733校の私立大学のうち，513校（70.0％）が実施の報告がある。また同省は，インターンシップとは，学生が在学中に，企業等において自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行うこととしている。その体験を通して生まれる成功，失敗の中から，問題解決のプロセスを経た結果生じる学習意欲の向上と，将来のキャリアデザインに対する認識の醸成を促すことは，インターンシップをとおして大いに期待される。

そこで本授業では，スポーツ健康科学部に開講された「スポーツ救命・トレーナー実習」「スポーツマネジメント実習」「スポーツコーチング実習」「スポーツ教育学実習」を履修した学生42名分の報告書をもとに，実習受け入れ団体の担当者による学習内容の評価から，本授業の成果について報告するものとする。

2．インターンシップの形態と内容

インターンシップ授業を展開するにあたり，８つの外部団体から実習受け入れの協力を得ることができ，その実施方法を４つのグループに分類した（図１）。

図１　実習先のグループ

１）ゼミプロジェクト型（Group Ⅰ）

ａ）実習先

東京オリンピック・パラリンピック招致委員会

ｂ）内容

３年生の専門演習の一環として導入し，それぞれの担当教員が提案する「プロジェクト」型学習に取り組み，外部専門家や地域・企業・学校などと連携しながら「計画→実行→評価」の作業を展開していく。

２）地域連携型（GroupⅡ）

ａ）実習先

龍ヶ崎市教育委員会スポーツ振興課，龍ケ崎市企画調整課

ｂ）内容

龍ヶ崎市内の小学校におけるボランティア活動を通して，児童・生徒との関係作りや先生方との交流を深め，現場教育の雰囲気を体現することによって，その中から，教育に携わる者の使命や役割を学び，自己の職業意識を確立していくことをねらいとし展開していく。

３）提案型（GroupⅢ）

ａ）実習先

つくばマラソン実行委員会（つくば市教育委員会），NPO法人スマイルクラブ，日本視覚障害者サッカー協会，NPO法人アクティブつくば

ｂ）内容

教員の社会的活動実績のつながりの中から外部団体の受け入れ先を学生に提案し，学生自らが面接から書類作成作業を推進させ，実際のプロジェクトやイベントのマネジメントに参画する。

４）自己開拓型（GroupⅣ）

ａ）実習先

浦和リトルシニア，帷子サッカークラブ，牛久二小サッカースポーツ少年団，㈱ジョイフルアスレティッククラブ

ｂ）内容

教員の指導のもと，自らの興味関心に基づいて実習先を選択し，受け入れ先責任者との交渉や書類作成作業，スケジュール管理などを自らの責任で行うものである。

３．書類申請から報告書作成までの手順

本学科においてインターンシップ科目での単位取得までの手続きには12の行程を経なければ単位を取得することができない。そのねらいとして現代社会は，すべての事柄が書類等の作成をおこない，正規の手続きを経て成り立っている。いわば，社会のルールをインターンシップという科目を通して，身につけてもらうことにある。インターンシップ単位習得までのプロセスは，次のとおりである。

１）実習先の決定

インターンシップを行うにあたって，まず重要なことは実習先を決定することである。基本的に本学科では，学生自らがインターンシップ先を見つけてくるのが原則である。また，学生が体験したいインターンシップ先の職種・業種について，実習先が受け入れを認めれば，職種・業種についての決まりは設定していない。しかし，スポーツ健康科学部のインターンシップでは，スポーツに係わりのある職種・業種でインターンシップを行いよりよい経験を積んでもらうために，本学教員を通じて，スポーツ関連団体や企業へのインターンシップ先を提供していることが特徴としてあげられる。とりわけ，本学部では，教育，コーチング，救急救命・トレーナー，マネジメントと４つのコースからなり，学生も興味関心に応じて，コースを選択している。従ってインターンシップ受け入れ先も，学校教育現場，チームのコーチング現場，スポーツ団体のマネジメント業務等，コース制に沿った形で受け入れ先を提供している。

２）書類作成

実習先が決定した後，学生は書類を作成する。本学科のインターンシップ科目で作成した様式は，７種類である。うち１枚は，インターンシップ科目担当教員が，実習先が単位認定に必要な条件を満たしているかを確認する。また，実習先での担当者が学生の実習評価を行うための書類を作成した。従って，学生自らが記入する書類は５種類である。実習前に作成する書類は，様式１から４までであり，実習中に作成する書類は様式５で，終了後に作成するのが様式６，７と分かれている。様式の内容については以下の通りである。

ａ）様式１……インターンシップ申込書（学生記入）。本様式は，学生の個人情報と実習先の受け入れ担当者の情報を記入する様式である。

ｂ）様式２……インターンシップ計画書（学生記入）。本様式は，実習先における学習目標を記入する学習計画書である。

ｃ）様式３……実習先認定チェックシート（教員記入）。担当教員が，学生から申請された実習先が，インターンシップにおいて必要な条件を満たすものかを確認する様式である。単位認定基準として以下の条件を設けている。

・実習時間が30時間以上であるか
・他の授業単位との併用はないか
・学外の団体が実習の機会を提供しているか
・実習受け入れ先の担当者が大学所定の実習記録を確認できるか

ｄ）様式４……誓約書（学生記入）。インターンシップは，学外で実施する授業であり，また，各種団体が保持する情報を取り扱うことになる。実習に対し真摯に取り組むこ

とやその団体で知りえた情報について守秘義務があることを誓約するものである。

e）様式５……インターンシップ日報（学生記入）。実際に学生が実習中に作成する書類である。日報を実習内容や反省を記入することによって学習効果を高めるねらいがある。

f）様式６……インターンシップ実習評価（受け入れ担当者記入）。本書式は，実習受け入れ担当者が学生の実習に対する取組みを評価するものである。

g）様式７……インターンシップ報告書（学生記入）。実習終了後，インターンシップを経験してどの様なことを学習することが出来たのか，書式の内容に沿って報告書を作成する。

３）報告書作成

実習終了後，学生は実習の振り返りとして報告書を提出する。上述したように様式７の内容に沿って実際に作成する。数年後，実際に学生は社会人として実際の職場に就くことになるが，この中で，実際に働く事とはどういったことかついて，考える項目を設定している。これは昨今，新入社員の早期退職という問題が社会で問題になっている。これは，学生が描く「仕事像」にギャップが生じているからと考え，本学科では，「仕事」とは何かについて考える機会を設けさせている。

報告書提出は，実習終了後１週間以内とし，本学科インターンシップでは，書類提出→実習→報告書提出この一連の流れをインターンシップとし，社会で活躍できる有能な人材の輩出に努めている。

４．実習で得られた成果と評価

学生が自ら設定した到達目標，目標の達成状況，および受け入れ団体からの評価について詳細を以下に示す。

１）東京オリンピック・パラリンピック招致委員会

a）到達目標

・円滑に業務が行えるように行動し，イベント参加を通してマネジメント能力の向上と企画力向上そして統率力向上を目標として業務を遂行し，運営のプロセスを学び将来に活かすことを目標とする。（４年生）

・オリンピック招致という観点からスポーツに対する考えを深める。また特定非営利活動法人をはじめとする会社組織の体制について知る。（３年生）

b）達成できた内容

・スポーツマーケティングについて学べたことで，招致活動に関する意味が詳細にわかった。また，自分自身のスキルアップもでき，全体的に実習を始める以前より向上したと感じられる。社会人として，指示を待つだけでなく自ら行動することもでき，将来に役立つ事が期待される。（４年生）

・非営利活動法人の組織体制について理解する事ができた。（４年生）

c）達成できなかった内容

・イベント活動の際には事前に様々な仕事のイメージが想定できていなかったために「臨機応変に行動する」ことが求められる現場で思うように行動できなかった。事前の学習が必

要であると痛感した。（3年生）
・自ら仕事を探し，積極的に行動できなかった。（3年生）

d）実習内容についての所感
・仕事をするにあたって，自分の行動によって組織が動くことに繋がるので，個人の都合ではなく，必然的に責任が生まれると感じた。（3年生）
・実社会で一時的ではあるが仕事を体験することができて，自分をさらに強く，そして大学では学ぶことができないことを経験できた。現在大学で学んでいる勉強をしっかり行って，積極的に外部で様々なことを吸収できるようにしたい。（3年生）

e）実習受け入れ担当者の評価
・あるイベントでは，関心のあることに対して質問をするなど，様々な業務を経験しようとする意欲，積極性を感じることができた。仕事に対する集中力を高めることで，より多くの成果を得ることができたのではないかと感じる。（招致委員会）
・他のインターン学生を牽引するリーダーとしての立場的存在であった。仕事に対して積極的に取り組む姿勢がとても頼もしかった。（招致委員会）

2）つくばマラソン

a）到達目標

つくば市スポーツ振興課と連携し，インターンシップを通じ社会人への第一歩となるよう活動をする。また，行政事業に携わることにより，スポーツ運営の仕組みなどを理解し，将来的に自分の経験として多くを得られるようにする。具体的にはスポーツイベントの準備などに関わるマネジメント及び運営スタッフとのコミュニケーション，大会当日全体に関わるマネジメントについて学ぶ。（4年生）

b）達成できた内容

行政という立場から普段とは異なる視点でスポーツイベントに携わり，自らが業務を行う事によってスポーツイベントの仕組みを理解し，これに関する新たな見方を発見し，実感できた。（4年生）

c）達成できなかった内容

学生という立場から社会人という立場に携わりながらも，どこか自分に甘えを作ってしまったように感じる。そのため自分が行うべき業務にも支障がでることがあったので，少々悔いが残る。（4年生）

d）実習内容についての所感

アルバイトとは全く異なるものであり，社会に出る前の者にとっては貴重な経験である。働くという面では同じだが，社会人と同じ立場として大規模なスポーツイベントに携われるということは，なにものにも変える事ができないものである。（4年生）

e）実習受け入れ担当者の評価

慣れない業務にあたりながらも，落ち着いた態度で確実に業務をこなしていた印象がある。イベントに参加する立場とは全く逆ではあったが，この経験を勉学に活かして欲しい。（4年生）

3）NPO法人　スマイルクラブ

a）到達目標

・運動が苦手な子供に対してサポートをすることにより，指導者，教員，社会人としての能力を養う。また，実習を通してどのようにしたら子供達に喜んでもらえるかなど自ら考え工夫する事によって将来のキャリアに活かす。（3年生）

b）達成できた内容

・子どもとのコミュニケーションをとることができ，運動を通じ多くのふれあいを築くことができた。就職の前に多くのことを学べる場であり，自分自身の考え方を改められた。（3年生）

c）達成できなかった内容

・子ども達に対して，いかによりわかりやすくアドバイスをするかについて常に課題としていたが，最後まで満足のいく達成感を得られなかった。まずは，子どもを知り，指導の際の言語力や発想力を身につけなければならない。（3年生）

d）実習内容についての所感

・本実習は，自分が現在持っている知識，技術をどれだけ活かせるのかについて確認することができる場であると思う。常に考え，謙虚であり，向上心を抱いた人物でありたい。（3年生）

・指導する立場を経験することができ，自信を持つことができた。人のために働く事が自分のためになるということを得ることができた。（3年生）

e）実習受け入れ担当者の評価

・事前に業務の内容を大変よく理解し，指導の補助に携わってくれた。補助としての動きは大変良く，先を考えて用具の準備をしたり，子ども達を先導してくれていた。今後も当団体の指導に大いに貢献してもらいたい。（スマイルクラブ）

・自分なりに課題を見つけ，1つ1つ丁寧に解決しいく真面目さは，将来の強みとして活かされることであろう。その心を忘れずに確実に成長してもらいたい。（スマイルクラブ）

4）日本視覚障害者サッカー協会

a）到達目標

・視覚障害者への体育的指導を通して，障害を持つプレイヤーにどのような指導方法が適切かを理解する。（4年生）

・自らにとって最大のサポートができるよう，相手の立場に立って考え，何をすべきか一歩先を見据えた行動がとれるようにする。（4年生）

b）達成できた内容

・実習前に同協会ホームページを活用し，ブラインドサッカーについて理解していったことにより，自ら積極的に行動を起こすことができた。（3年生）

・アジア選手権という国際試合の運営に携わることを通して，責任を果たすことの重要性を理解することができた。（4年生）

c）達成できなかった内容

・外国人選手とのコミュニケーションが，言葉の問題もあって取れなかった。片言でも英語でもっと話しかけるべきだった。（4年生）

・選手たちとのコミュニケーションが「指示待ち」になってしまい，自ら考えて行動することは十分には達成できていなかった。（３年生）

d）実習内容についての所感

・ブラインドサッカーは音や声を頼りにしているため，発声する機会が多い。そのためコミュニケーション能力を高める必要性を十分に感じた。（４年生）
・楽しいだけではなく，そこに携わる一人一人に責任があるということが分かった。誰か一人でも抜けてしまえば全体が成り立たなくなり，与えられた責任の大きさを感じた。（３年生）

e）実習受け入れ担当者の評価

全員が実習前にブラインドサッカーについての予習ができていた。数名はイベント終了後に選手たちと親睦をはかる姿勢も見られ，障害者，健常者との距離を近づける努力を自然の形で実施していた。アジア選手権では，早朝から夕刻まで，厳しい寒さの中それぞれの役割を果たしていた。この大会が成功したのも彼らの活躍が非常に大きかったと感謝している。（日本視覚障害者サッカー協会）

５）龍流連携による小・中学校での実習

a）実習概要と到達目標

この事業は，教育・文化，スポーツ，産業，人づくり・街づくり等の各分野において，流通経済大学と連携したまちづくりを展開し，「大学のあるまち」としての多くの可能性を探り，まちの活性を取り戻すことを目的に，平成16年２月に龍ヶ崎市の串田市長と流通経済大学の野尻学長によって「龍ケ崎市と流通経済大学の連携に関する協定書」を締結し，大学生を市内小中学校へ派遣して学習支援や生活支援を行う「ボランティア学生小中学校派遣事業」や大学施設を活用してのスポーツイベントなど各種事業を展開している。

この龍流連携の主な事業内容は，「市民大学講座」，「ボランティア学生小中学校派遣事業」，中学生サッカー大会「龍・流カップ2008」や「龍・流まちづくり推進事業検討調査」などが挙げられる。

スポーツ健康科学部で実施している「スポーツ教育学実習（インターンシップ）」は，この中の「ボランティア学生小中学校派遣事業」と連携を図り，本学部の学生を龍ヶ崎市内の小・中学校に派遣して，教育の現場体験を実施している。

その事業は，各小中学校で主に次の支援に分類されている。中間休み・給食・掃除の時間を通して，あいさつなどの基本的生活習慣の指導を行う生活指導支援型。教師の補助として，学習状況の確認，学習指導の手伝いを行なう学習支援型。総合的な学習の時間などで，スポット的な支援行なうスポット支援型。そして部活顧問の補助や専門的な技術の指導を行なう部活動支援型である。

平成16年から実施されたこの事業は，当初ボランティア活動として全学部の教職課程を履修する学生が行っていたが，平成20年度より，スポーツ健康科学部がいち早く単位化を導入し，現在では「スポーツ教育学実習（インターンシップ）」として，多くの学生が学校現場で様々な体験を得ている。

また，この事業は，熱心な学生が多いことから児童生徒の人気も高く，先生たちからも高い

信頼を得ており，龍・流連携の人気事業のひとつとなっている。派遣された学生達も，実際の教育現場に出て子どもたちと触れ合うことで，学習意欲の向上につながっており，双方にとてもいい効果が現われている。

実際の教育現場に出ることにより，指導者になるための「教える技術」を身に付けることや，先生方や生徒達と，良いコミュニケーションをとり，社会に出るための「コミュニケーションスキル」を身に付けることである。インターンシップが終了したときには，自分が今よりも社会的・精神的に大きく成長できるような実習になっている。

b）達成できた内容

野球部を指導するときの注意点や生徒との良いコミュニケーションを取るための話し方などを取得することができた。また顧問のやるべき行動について学ぶことも出来た。（３年生）

c）達成できなかった内容

自分自身で指揮を取り，練習や試合が出来なかった。また選手達の保護者と話しをすることができなかった。（３年生）

d）実習内容についての所感

どの学生も積極的に実習（インターンシップ）に参加し，授業による単位の取得以上の成果を手にしているようである。教職課程の学生は4年生になると教育実習を実施するが，その前に教育現場を経験することは，教育実習の内容をより高度で成熟したものになると考えられる。また机上では決して学べない経験や問題を解決する能力を獲得するとともに，自己の適性についても洞察を深めることが出来ているようである。昨今，教育現場に部外者が入っていくことが難しくなっていくなか，本学の学生を受け入れ，現場指導の機会を頂いている龍ヶ崎市にも感謝している。今後も相互に有益な活動となっていくことを期待している。

e）実習受け入れ担当者の評価

教員を本気で目指し，野球の指導者になりたいと考えているようで，素晴らしい実習態度だった。技術的な指導ばかりではなく，生徒の内面も考えての指導が大きなポイントとなることが理解できたようである。信頼される指導者を目指して今後も頑張ってもらいたい。（中学校教諭）

５．実習成果に関する評価分析

本実習に参加した学生に対して，実習の成果を評価する目的で４項目の質問を設定し，実習の受け入れ先担当者に依頼し，それぞれを５段階の評価（５：大変良い／４：良い／３：普通／２：もう少し努力が必要／１：かなり努力が必要）で質問に回答していただいた。

質問の設定には，実習に対する事前準備，実習中の取り組み方，そして実習の成果に関する評価項目に分別される（表１）。

それぞれの回答群の結果から，平均値および標準偏差値を求めた。その結果，研修に対する理解度は，平均4.2（S.D.±0.64）。研修や課題に対する意欲，積極性は4.4（S.D.±0.61）。服装や態度（挨拶，マナーなど）に対しては，4.29（S.D.±0.73）。そして研修の成果に対しては，4.29（S.D.±0.59）であった（図２）。これらのうち，最も高い評価を得た「研修や課題に対する意欲，積極性」の項目については，学生

表１　グループにおける評価（n＝42）

Group	理解度	意欲・積極性	服装／態度	研修の成果
	mean(± S.D.)			
Ⅰ	4.0 (1.65)	4.5 (0.99)	4.3 (0.91)	4.3 (0.91)
Ⅱ	4.2 (0.64)	4.4 (0.58)	4.3 (0.71)	4.5 (0.6)
Ⅲ	4.2 (0.64)	4.4 (0.58)	4.3 (0.71)	4.5 (0.6)
Ⅳ	4.5 (0.5)	4.5 (0.5)	4.0 (1.0)	4.0 (0)

(5点満点)

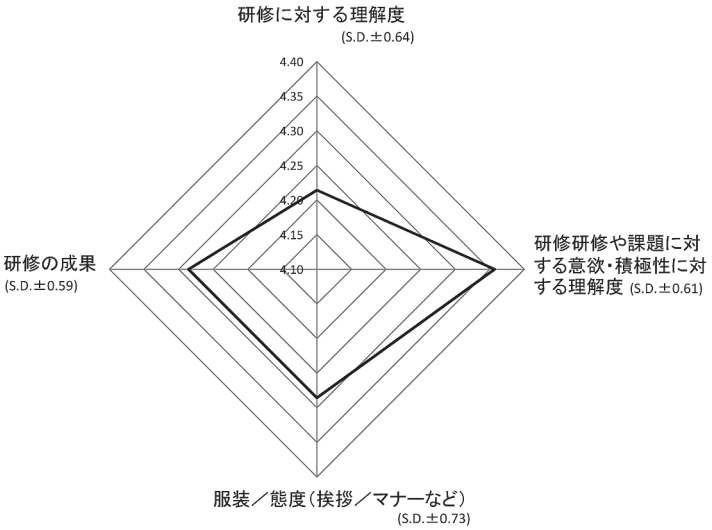

図２　学生に対する全体の評価（n＝42）

自身が作成した日誌から評価すると，学外で行われた実際の現場実習が自分自身にとって興味関心があるものであり，将来の職業選択に役立つと考えていたことによって，自発的な行動と学びの欲求を創出したことが高い値を示したと考えられる。

一方で，「研修に対する理解度」が最も低い値を示したことは，事前の実習に対する準備不足が反映されたものと考えられる。このことは，今後学内でのオリエンテーションや他の関係授業をとおして補足していくことによって改善する必要がある.

6．今後の展望

学生にとって，学外での実践的な学習の機会を与えられたことは，将来のキャリアデザインを形成する段階で，とても重要な過程として位

置づけられると考える。

多くの大学においてインターンシップ授業が採用されている昨今では，大学のみならず，日本サッカー協会においても，トップチームの代表監督になるために必要とされるS級コーチライセンス取得カリキュラムで展開されている。このように，実践的現場学習の機会は，理論と実践行動の間でのギャップを生み，あるいは机上で学習することの意味を再考する，まさにOn the Job Trainingをとおして，自らの実力と，将来のキャリアデザイン構築のための重要な機会として展開されたと示唆する。

しかしながら，インターンシップの普及に伴い，目的や期待する業務内容のズレによる実習先と大学・学生のミスマッチ，実習先が不足したり特定の実習先に希望が集中したり需要と供給のバランスが取れない，マニュアルの整備や事故・トラブル等への対応といった推進体制の格差など，様々な問題が指摘されている。

これらの問題を解消するためにも，大学における事前指導やレポート作成・報告会による情報交換の機会提供，安心してインターンシップ活動に取り組めるリスクマネジメントなど，実習先と大学・学生がお互いノウハウを蓄積しながら，効果的に成果を得られる推進体制を構築していく必要がある。

また，何よりも学部教育の全体像の中で，インターンシップの位置付けを明確にすることも重要である。特に本学部では，スポーツ健康科学という専門性について学習する機会を求めた場合，スポーツ健康に関連する企業や機関に限りがあり，十分な推進体制の整備を期待することが難しいボランティア組織や任意団体が受け入れ先になる機会も少なくない。また，スポーツ健康に関連する業種に就職できる機会が非常に限定されているという現状の中，キャリア教育という点においてどのような位置付けにするかという課題もある。

しかしながら，例えば，地域社会に対して専門性を活かした社会的活動を提供することで，専門的あるいは社会的な知識や経験を得る学習機会ができ，市民としての責任を感じながら学んでいく「サービス・ラーニング」という考え方も広まりつつある。つまり，キャリアや就業体験などのインターンシップという枠組みにこだわる必要はなく，目的を明確にして，専門性を活かした体験型学習のあり方を確立していくことが重要である。